

文化が接触する世界、いわば境界領域にあるエミシ社会の姿を外浜というフィールドで描こうというねらいをもって編まれたものであり、各執筆者が述べられた内容からはそうした目的は十分に果たされている。

本書は、通史の流れに沿いつつ考古学の概説書としても十分な内容を備えており、青森市民のみならず多くの方々に一読を薦めたい書である。遺跡の多くは、先に刊行された「新青森市史」資料編1考古編でくわしく取り上げられている。その部分もあわせて活用いただくことで、本書の理解がいつそう増すものと思う。

かつての「青森市史」全十五巻には通史編などは盛り込まれなかった。昭和四十九年三月に刊行された最終巻のあとがきには、「市史編纂を終了するにあたり、心残りのことは青森市の古代編、考古編を編述しなかつたことである。」と記されている。今回、通史編の一巻として原始・中世の歴史が最新の資料をもとにまとめられたことは大変喜ばしい。

(A5判、七五八頁、二〇一一年三月、青森市史編集委員会、六九三〇円)
(うべ・のりやす 八戸市埋蔵文化財センター副参事)

『新編弘前市史 通史編 岩木地区』

山下須美礼

『新編弘前市史 通史編 岩木地区』は、平成十八年二月に弘前市・相馬村との合併により新たに弘前市の一部となった岩木地区、すなわち旧岩木町域の歴史を、時系列的に叙述した一冊である。当初は旧岩木町において『岩木町史』編さん事業として計画されたが、その後の編さん過程の歳月において平成の市町村合併のときを迎え、新たに『新編弘前市史』のシリーズの一つとして組み込まれることとなった。この巻に先立ち、平成二十二年三月には『新編弘前市史 資料編 岩木地区』が刊行されている。旧岩木町は、自治体としての実在は失ったが、本書の編さんにより、歴史を読み解く場として、永く記録されることとなった。本書に編まれた通史は、旧岩木町域という、昭和三十年から約五十年間存在した、自治体としての地域的範囲が、過去においてどのような歴史の一部を構成し、あるいは歴史の主体となってきたのかを物語るものである。自治体としての地域区分が消滅した今、人々がどのような暮らしを展開してきた世界なのかを振り返り、そこからどのような未来を展望すべきかということについて、この地域に思いを寄せる人たちが共通に思考する場を、本書は提供する意義を持つ。

さて本書は、次の七章で構成されている。

第一章 岩木の自然

第二章 原始・古代の岩木

第三章	中世の岩木
第四章	近世の岩木
第五章	近代の岩木
第六章	現代の岩木
第七章	岩木と温泉

自然分野に関わる事象がまとめられた第一章と、この地域の特質の一つである温泉についてこの地域の特質の一つである温泉について自然・歴史・民俗の各分野から取り上げた、特色ある第七章に挟まれた第二章から第六章は、原始時代から現代までを時間軸に沿って区分した構成であるが、監修者の巻頭言にもあるように、近現代史重視の方針が取られ、紙幅の多くは近代以降、平成十八年の合併までに費やされている。それでは具体的にその叙述の内容についてみていきたい。

第一章「岩木の自然」は、第一節「地形と地質の概観」、第二節「植物」、第三節「動物」の三節で構成され、津軽富士とも呼ばれる岩木山を中心とした、岩木地区の自然環境について、詳述されている。岩木山は標高一六二五メートルの単独峰で、県内の最高峰である。高山の各環境要素がコンパクトにまとまっており、観察に適した山として、植物研究上、早くから多くの研究者に注目されてきたという。フランス人神父フォーリーは明治初年より岩木山での標本採集に携わったが、採集した植物の中には、長い間岩木山のみ分布するとされたミチノクコザクラも含まれた。このミチノクコザクラは、岩木山を代表する植物として、旧岩木町の花に指定され、町章のモチーフとされた。本章では、人が必

要として造りあげ関わりを続けながら維持されてきた生態系についても言及している。水路やため池など、農業用水系における多様性は、人との関わりの中で偶然にも成立しているものであり、それらの存続は、今後我々がどのように自然と関わってゆくかにかかっている、との問題提起がなされている。

第二章「原始・古代の岩木」は、第一節「旧石器時代」、第二節「縄文時代・弥生時代」、第三節「古代」の三節で構成されている。この章では、青森県内、もしくは岩木山ろくでの発掘・研究成果を広く活用し、この地域の原始・古代を再生しようと試みている。旧石器時代から縄文時代にかけての広域交流を示す黒曜石は、青森県内では深浦町六角沢などが産地として知られてきたが、岩木地区の中村川上流、孫産童子沢にも黒曜石の産地があったことが発見・報告されたとの、近年の新しい研究成果も盛り込まれている。古墳時代になると、古墳文化や続縄文文化に共通する要素が諸処に認められ、境界地域としていずれの文化圏にも明確に属さない独特な文化を有していたと考えられるという。

第三章「中世の岩木」は、第一節「大浦氏進出以前の鼻和郡」、第二節「津軽独立」をめざして、第三節「大浦城と大浦城下」の三節で構成されている。津軽地域が鎌倉幕府の支配に組み込まれる過程で、岩木地区は鼻和郡の一部となり、現青森県域のすべては北条得宗領となった。本書では、地頭代官職として土着していた安藤氏の、惣領が相伝する所領を、「津軽平野の河川交通体系と、北の内海世界を押さえる重要地域」であったとの見解を示しているが、「津軽平野の河川交通体系」の要衝とは、鼻和郡内の二カ所の所領を指す。安藤氏の滅亡ののち、津軽

の地に乗り込んだ南部氏の系譜を継ぐといわれる大浦為信について、本書では「表裏仁」という言葉で表される「油断ならない人物」との評価の一方で、領主として撫民を施し、民衆もそのような為信に従い戦った、という別な一面を読み取り得る史料の存在も提示している。

第四章「近世の岩木」は、第一節「藩政の成立と岩木」、第二節「農政と岩木の村落」、第三節「岩木をめぐる山野と川」、第四節「宗教政策と岩木の寺社」、第五節「人々の生活―「金木屋日記」にみる岩木―」の五節構成である。弘前藩政において、岩木地区の村々は陸奥国津軽郡鼻和庄駒越組および高杉組に属した。十八世紀に弘前藩が担った蝦夷地警衛において、人馬の供給、郷夫の動員等、民衆への負担が増加した状況が描かれている。このような中、文化十年に起こった大規模な一揆・強訴は、駒越組の岩木地区の村々から始まり、周辺に広がっていったものと考えられるという。十八世紀後半になると、天明飢饉や農村の疲弊を背景に、本来は禁止されていた松前・蝦夷地への出稼ぎが黙認されるようになるが、外圧に対応した蝦夷地経営や政策の中で、岩木地区もまた、松前への労働供給地として的一端を担うようになった。

第五章「近代の岩木」は、第一節「岩木山の開拓に挑んだ人たち」、第二節「岩木山をめぐる光景」、第三節「岩木山神社」、第四節「岩木村の戦争体験」の四節で構成されている。明治四年に青森県が誕生すると、岩木地区は第三大区五小区に編入されたが、その地への最初の変化として、元中津軽郡長の笹森儀助が土族中心に牧場運営を試みた農牧社の設立が取り上げられている。その一方で、同時期に農民による牧場会社組織が二社存在したことが本書では指摘され、近代の開発を考える上で農

民達も新しい時代に対応して結束した意義は大きいと評価している。本章では、藩祖津軽為信以来、藩主家の厚い保護のもとに津軽地域の守護神として信仰を集めてきた岩木山神社が、いかに神仏分離を経験し、国弊小社へと位置づけられたか、そして戦争の時代に入り、国家鎮護にいかん動員されていったかについても紙幅を割いている。

第六章「現代の岩木」は、第一節「岩木山ろく農地開拓」、第二節「三村合併と新岩木村の誕生」、第三節「山ろくをめぐるまなざし」、第四節「町制施行―移りゆく町のように―」、第五節「岩木山ろくの観光資源」、第六節「ありがとう岩木町」の六節構成である。戦後開拓から始まり、平成の大合併までを記述する章である。戦後の岩木地区は、戦前と同様、駒越村・大浦村・岩木村の三村で構成されていたが、集落対抗運動会に象徴されるように、集落ごとの連合体によって村が形成されていた。昭和の大合併に際し、中津軽郡全村が弘前市と合併しようとの意向もあつたが、岩木地区では三村による合併が希望され、分村運動・境界変更を経て、新「岩木村」が誕生した。その際、旧村の公文書の類が大部分失われたことは、三村時代の歴史を振り返る上で大きな痛手となっており、同じく合併を体験する地域で、同じ問題が繰り返されないよう、警鐘を鳴らしている。一方その損失を補うものとして、町会所蔵資料を位置づけたことは非常に意義深い。昭和三十六年に町制施行し岩木町となった岩木地区は、平成に入り新たな合併問題と向き合うことになる。数々の協議を重ね、平成十八年二月、岩木町は弘前市・相馬村と合併、新しく弘前市となった。

第七章「岩木と温泉」は、第一節「温泉とは」、第二節「岩木地区の

温泉」、第三節「江戸時代の湯治」、第四節「観光と開発の目玉となった山ろくの温泉」、第五節「湯治場としての温泉」の五節で構成されている。岩木地区には五十八の源泉があり、嶽、湯段、百沢、三本柳の四つの温泉が分布している。嶽温泉や湯段温泉が、江戸時代から藩士や民衆の湯治場として利用されてきたようすとともに、近年においても農家の人たちの湯治場として重宝され楽しまれてきたようすが様々な資料を用いて描かれている。「金木屋日記」では幕末の民衆の湯治のようすが、小山内釣月「明治三十年七月湯段温泉入浴日記」では明治期の湯段温泉の状況、さらには聞き取り調査によって近年の湯治のようすが紹介され、連綿と続く湯治の姿を明らかにしている。

本書の特色の一つとして、コラム欄の存在にも触れる必要がある。

「I雪形」「II奇跡的に拾われた土偶」「III『弘前藩史』の編さん——「東日流記」の成立——」「IV岩木地区の絵馬」「V弘前中学校の嶽ストライキ」「VIお山参詣の歴史——近世から現代まで——」「VII終戦と敗戦」「VIII会（町内会）所蔵資料の歴史的価値」「IX百沢土石流災害」という興味深いタイトルがならび、一つずつの話題として拾い読みすることもでき、本文を読むにあたっての導入の役割も果たしている。

本書の構成にあえて注文をつけさせていただとすると、岩木地区周辺の地理にそれほど馴染みのない筆者のような読者にとつては、付図とは別に、本書内に周辺地域も含めた対象地域図を入れていただけたら、地名や地域間関係を一回ずつ確認することができ、より理解がしやすかったのではないかと思う。

本書を一読し、最も強烈に感じたのは、編集委員長が「編集を終えて」でも記しているように、「岩木山」の存在の大きさである。どの時代、どの分野のページを開いても、その背景にはすべて「岩木山」の存在が感じられる。このことは、この地域の生業や暮らしや文化が、常に「岩木山」との関わりの中で展開してきたことを示すとともに、本書が「岩木山を仰ぐ」地域を、一つの歴史を物語り得る世界として描ききったことの証しでもある。本書には、ときには支配・行政区画を飛び越え、またときにはより小さな単位で紡がれた歴史的事象が積み重ねられているが、その主体のすべてには岩木山が映っていたということが重要である。歴史を共有することは、風景を共有することでもある。

自治体史の寄る辺である自治体そのものが喪失する中で編さんされた本書が、「岩木山」という視点を提示するのは、こののち岩木地区に暮らす人々、また岩木地区に思いを寄せる人々が、地域から歴史を考えるに際しての、道しるべとしての意義を含むと受け止められよう。

前年の『新編弘前市史 資料編 岩木地区』の刊行に寄せて、末永洋一氏は「地域アイデンティティ」の拠り所となる「通史」出版への期待を表しているが（『国史研究』第一二九号）、まさに本書は、その期待に十分応える一冊になっていると考える。

（A4判、価格三二〇〇円（税込）、弘前市、二〇一一年三月刊）
（やました・すみれ 筑波大学大学院人文社会系）